

Tab.6 遠江における甲冑出土例

古墳名	墳形	規模(m)	埴輪	甲	冑	頸甲	肩甲	付属具	類型
各和金塚	前方後円墳	62	○	三革短	三革衝	○	○		A
五ヶ山B2号	方墳	33×28	○	三革短	三革衝	○	○	草摺?	A
千人塚	円墳	49	○	三革短	三革衝	△	△		(A/B)
安久路2号	円墳	26	無	長革短	三革衝				B
安久路3号	円墳	27	○	長革短			△	小札	(C)
石ノ形	円墳	27	○	横舩短					D
文殊堂11号	円墳	15	無	三革短					D
林2号	円墳	16	無	三舩短					D
狐塚	方墳	22	○	長革短					(D)
土器塚	円墳	36	無	長革短					(D)
(伝)幕ヶ谷	不明	不明	不明	革短					—

〈凡例〉・○:存在する △:存在する可能性がある ():不確定な事例であることを示す ・甲冑の略称:[鈴木2014]

て本来の組合せ関係が必ずしも明確でない資料も含んでいるが、おおよその傾向を知る上では問題は少ないだろう。この整理により、優位な武装である A 類型は長方板革綴短甲よりも三角板革綴短甲に多く認められることが分かる。襟 A 類型を含めると、三角板革綴短甲がかかわる組合せのうち、最優位の武装が占める割合が半数に近くなり、長方板革綴短甲との差異がより明確に示される。

いっぽう、短甲のみで用いられる D 類型については、三角板革綴短甲よりも長方板革綴短甲の方がその割合が高い。長方板革綴短甲を用いる D 類型の中には、三重県石山古墳や福岡県鋤崎古墳、鳥取県古郡家 1 号墳など、中期初頭（中 1 期）の盟主的な前方後円墳が含まれる。長方板革綴短甲の成立当初は、D 類型が優位な武装として認識されていたとみられる。方形板革綴短甲を 1 領副葬する古墳時代前期的武装が踏襲されたものといえるだろう。やがて三角板革綴衝角付冑や附属具の生産が本格化すると、冑と組み合わせる短甲として意匠が共通する三角板革綴短甲が好まれたと評価しうる。

このように、長方板革綴短甲に D 類型が高確率でみられることについては、三角板革綴短甲とは異なり、方形板革綴短甲との系譜の連続性が意識されていた可能性がある。ただし、長方板革綴短甲にも冑や付属具が伴う A 類型が少なからず認められるので、必ずしもこうした認識が古墳時代中期の中で貫徹されているとはいいがたい。ここでは、A 類型と D 類型の比率差から、大まかな傾向として、長方板革綴短甲は三角板革綴短甲よりも低位の武装として認識されていた可能性を指摘するにとどめておきたい。

狐塚古墳に副葬されていた甲冑武装を長方板革綴短甲 1 領と捉えるなら、短甲のみを副葬する D 類型として最も一般的なあり方をみせているといえるだろう。また、遠江の近隣地には他にも甲冑出土古墳が集中するが（Tab.6）、A 類型は前方後円墳をはじめ、狐塚古墳よりも規模の大きな古墳に認められる。墳形や墳丘規模の比較からは、狐塚古墳の武装は整合的に理解しうる階層序列の中に位置づけることができるだろう。

（4）小 結

狐塚古墳の事例を通じて、長方板革綴短甲の類型を再検討し、その編年的位置づけについて評価を試みた。狐塚古墳の短甲は、長方板革綴短甲の製作段階を 3 段階に分けたうちの第 2 段階から第 3 段階にかけての時期に位置づけることができ、中 3 期と想定した古墳の築造時期とも矛盾しない。また、狐塚古墳には長方板革綴短甲 1 領のみが確認されているが、一辺 22 m の方墳の副葬品として相応な内容と評価した。ただし、短甲 1 領のみとはいえ、鉄製甲冑が副葬されていた意義は大きい。遠江で出土が知られる甲冑は中期の前半に位置する革綴製品が多いが、狐塚古墳の事例からは重層的な武装体制の一翼を担う被葬者の性格をうかがうことができるだろう。

3 狐塚古墳築造の歴史的意義

(1) はじめに

検出遺構と出土品の分析によって、狐塚古墳にかかわる情報が明確になった。ここでは、これらの情報をもとに、小地域の中における首長墓系譜を整理し、近隣地域をふくめた階層構造について触れておきたい。まずは、都田川流域（浜名湖北岸域）という内湖の隣接地に方墳が構築されることに着目し、その立地環境、墳形、副葬品などが類似する事例との比較を通じて、古墳の被葬者像に迫るとともに、狐塚古墳が築造された歴史的意義について検討を加える。

(2) 都田川流域における狐塚古墳の位置

首長系譜における位置づけ 狐塚古墳が築かれた都田川流域（浜名湖北岸域）は、盆地が連なる特徴をもち、地形的にも完結性が高い。奈良時代には引佐郡として総括される地域であり、集落遺跡の動態と首長墓系譜の推移から地域編成の諸過程をあとづけることができる。

都田川流域内の小地域は、その地勢の様相から、①井伊谷盆地、②浜名湖沿岸域、③都田川下流域、④都田川中流域、の四つの小地域に分けることができる。この地域区分は引佐郡にみられる4つの郷（渭伊、伊福、刑部、京田）の範囲とも一致する。流域内を隔てる地形的特徴と、古代の行政区分が重なる点でも、小区分の有意性が明確な地域といえる（Fig.4・5）。

遠江における首長墓系譜を Fig.62 に示す。この地域の最有力の首長系譜は、前期から中期後葉の

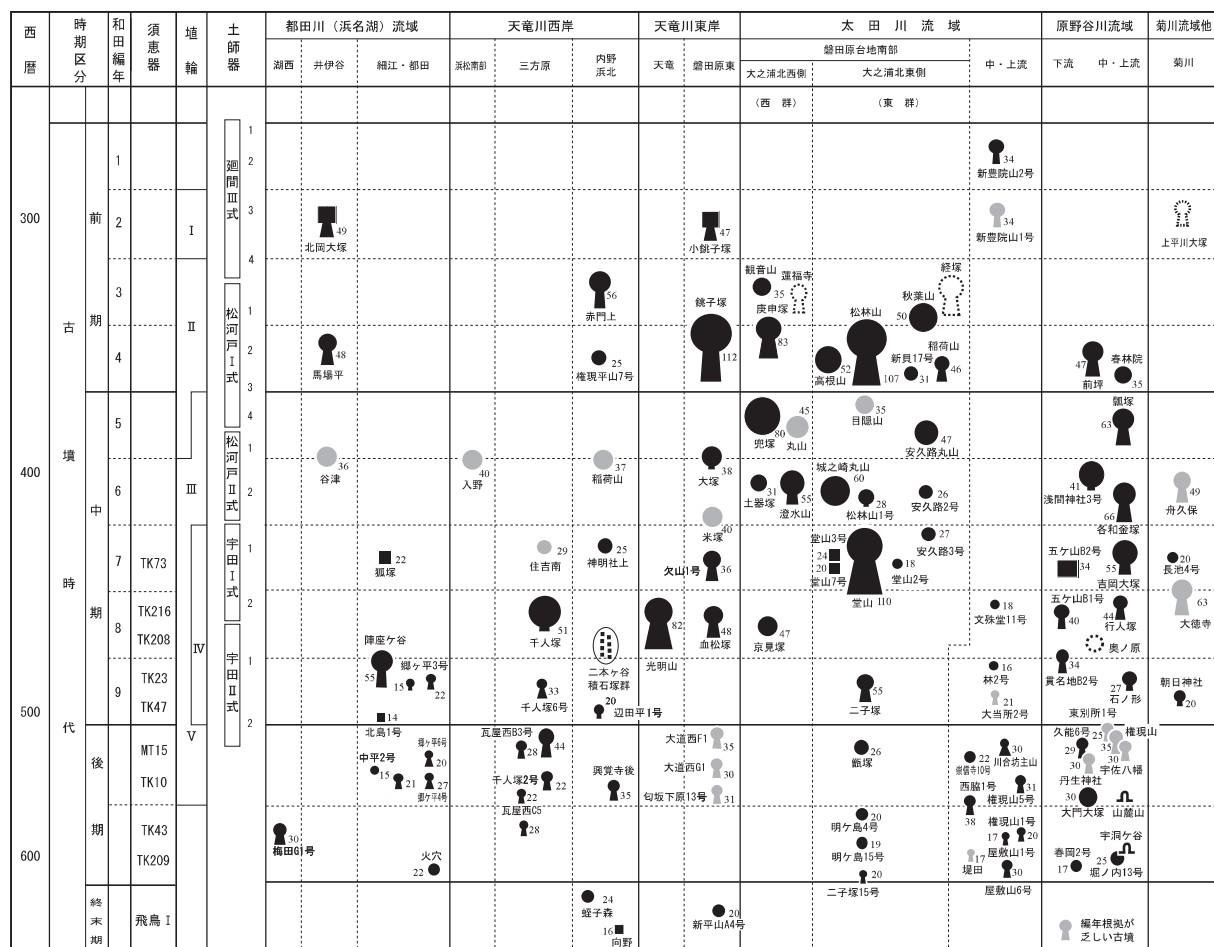


Fig.62 遠江における首長墓の変遷

間において、北岡大塚古墳（前方後方墳、49 m）、馬場平古墳（前方後円墳、48 m）、陣座ヶ谷古墳（前方後円墳、55 m）といった変遷が知られる。これらの古墳は、いずれも全長 50 m 級の大きさである。都田川流域では中期後葉以降、前方後円墳の規模が縮小化するとともに築造数が増加し、全長 20 m 前後の古墳（陣内平 1 号墳、郷ヶ平 3・4・6 号墳など）がみられるようになる。地域内の造墓地を整理すると、前期には井伊谷盆地に中心があり、中期後葉には都田川下流域に移動し、ほどなくして、都田川中流域にも拡散するという様相がうかがえる。集落遺跡の動態についても、前期の集落である北神宮寺遺跡が井伊谷盆地にあり、中期中葉以降には、川久保遺跡や岡の平遺跡、須部遺跡など都田川中・下流域に移る傾向があり、首長墓の移動は勢力基盤の移り変わりを反映したものと捉えることができる。

狐塚古墳は都田川流域の中でも首長墓の築造が低調な浜名湖沿岸地域に構築されている。古墳の築造時期も全長 50 m 級の古墳の築造地が井伊谷盆地から都田川下流域に移動する直前にあたる。また、狐塚古墳は、都田川流域において初めて埴輪を採用した古墳である。その後の前方後円墳にはすべて埴輪が樹立されていることをふまえると、一辺 22 m という規模の方墳とはいえ、地域内の首長墓系譜の中に位置づけうるのが首肯できよう。狐塚古墳が、前方後円（方）墳を機軸とした小地域内の勢力変遷の間を補完するような地域と時期に位置づけられる点は、この古墳の特徴を際立たせるものと評価しうる。

古墳の築造位置の違いが地域における求心地域の推移を示していると捉えると、狐塚古墳の被葬者が活躍し古墳を築造した時期において、浜名湖沿岸地域に都田川流域の中心勢力がおかれたと考えられる。この小地域は古代には伊福郷と呼ばれているが、浜名湖沿岸の可耕地が少ない地域にあたり、大規模な集落遺跡は知られていない。また、都田川流域の 4 地域の中で唯一、前方後円墳が構築されない地域でもある。このことは、狐塚古墳の被葬者が、生産力の優位性や、集落の隆盛などとは異なる勢力基盤をもっていた可能性を示唆する。

浜名湖北岸域の特質 その内実を考えるにあたっては、狐塚古墳の立地環境に注目すべきであろう。古墳の近隣には近世東海道の脇往還である本坂通（通称、姫街道）がもうけられている。本坂通は、古代には二見道と呼ばれ、三河国府と遠江国府を繋ぐ浜名湖北岸経路の重要な交通路であった。奈良時代に遠江国府がおかれた中泉から直線的に浜名湖北岸を目指すと、天竜川を越えた後、三方原台地を南東から北西方向に横断する。近世の街道は関所がおかれた気賀を経由するために台地の北西隅で一端、北寄りに屈曲するが、この屈曲を経ず直線的に浜名湖沿岸に至る経路を想定すると、狐塚古墳の脇に至る。狐塚古墳の西側には浜名湖の入り江が及んでいることを考えれば、浜名湖北岸の交通路と浜名湖を経由する海上交通網が交わる港湾施設を臨む位置に古墳が築かれた可能性が高いといえるだろう。

肥沃な平野部を意識しない立地環境をふまえれば、狐塚古墳の立地は海路と陸路の結節点を掌握することに主眼があったと判断しうるだろう。狐塚古墳には、近畿地方中枢部からの技術供与がうかがえる先進的な埴輪が導入されていることや、倭王権や地域の盟主的勢力との軍事的関係を示す長方板革綴短甲が副葬されていることから判断すると、海上交通網を重視した背景には王権側の要請が大きく影響を与えていたと捉えられる。

（3）遠江における首長墓系譜との関係

方墳の比較 ここまでの検討を通じ、狐塚古墳は首長墓系列に位置づけうることを確認したが、その墳形が方墳であることは、何らかの特別な背景をもっていた可能性を示唆している。ここで改めて、狐塚古墳が方墳であることの意味を検討しておきたい。Tab.7 に遠江における方墳（終末期を除く）を規模の順に整理した。葺石、段築、埴輪といった要素を備え、大型前方後円墳と同様の外観

Tab.7 遠江における方墳

古墳名	所在地	規模(m)	埴輪	段築	葺石	周溝	副葬品・土器等	築造時期
五ヶ山B2号	袋井市	32×28	○	2段築成	○	なし	甲冑、刀剣、鉄鏃、農工具	TK73
堂山3号	磐田市	24	○	2段築成	○	○		TK73
狐塚	浜松市	22	○	2段築成	○	部分的	短甲、刀剣、鉄鏃	TK73
堂山4号	磐田市	22	不明	不明	不明	(○)		
堂山7号	磐田市	約20	○	不明	○	○		TK73
大手内A6号	磐田市	19	×	×	×	○	土師器	前期後半
梵天13号	磐田市	19	×	×	×	○		TK23～47
明ヶ島5号	磐田市	18	×	2段築成	○	○	鏡、刀剣、鏃、農工具等	TK208
大手内B2号	磐田市	15	×	不明	×	○	土師器	中期後葉か
八幡神社南	磐田市	14	×	2段築成	○	○	剣、玉、鉄鏃、須恵器	TK216
北島1号	浜松市	14	○	不明	○	○		中期末～後期初
神明社上7号	浜松市	14	×	不明	○	○		不明確、中期か
下滝1-KF01	浜松市	13	×	×	○	○	須恵器	TK47～MT15
北島2号	浜松市	12	×	不明	○	○		中期末～後期初
下滝1-KF04	浜松市	11	×	×	○	○		中期末か
下滝5-KF14	浜松市	11×9	×	×	○	○		中期末か
瓦屋西C1号	浜松市	10	×	×	×	○	須恵器	MT15
大手内B10号	磐田市	8	×	×	×	○	須恵器	TK208
大手内B9号	磐田市	7	×	×	×	○	土師器	中期後葉か

を呈する一辺 20 ～ 30 m 級の方墳が、古墳時代中期を中心にして比較的広域に分布していることが分かる。

遠江における最大の方墳は袋井市にある五ヶ山 B2 号墳である。丘陵上の制約が大きい土地を最大限いかして墳丘を構築しており、その規模は 32 × 28 m である。これに次ぐ規模の方墳は、堂山古墳の陪冢（西川 1961）として位置づけうる堂山 3 号墳（一辺 24 m）であり、一辺 22 m の狐塚古墳がその次に続く。こうした方墳の属性をみると墳丘規模一辺 20 m ほどを境界として、より小さい規模の古墳には埴輪をもたないものが多くなり、同じく一辺 14 m ほどの規模を境界として段築をもたないものが、さらに一辺 10 m ほどの規模を境界にして葺石をもたないものが増加する。遠江における古墳時代中期の方墳は、墳丘規模と埴輪、段築、葺石といった諸要素の有無が比較的良好に対応しており、古墳の外観にかかわる諸要素に階層性があらわれていると評価できるだろう。以下、埴輪を持たないものが圧倒的に多い一辺 20 m 級未満の方墳を小型方墳、葺石・段築・埴輪を備える一辺 30 ～ 20 m 規模の方墳を中型方墳、五ヶ山 B2 号墳の規模をこえる一辺 40 m 級以上の方墳を大型方墳と呼んでおきたい。

同時期の方墳 中型方墳の築造時期が中 3 期に集中することは、注目してよいだろう。狐塚古墳をはじめ、埴輪を備える方墳そのものが極めて少ないことを考慮すると、遠江における中型方墳はそれぞれ個別に築造されたのではなく、互いに何らかの関係をもって構築されたと想定する方が自然であろう。とくに五ヶ山 B2 号墳と狐塚古墳は後述するように、立地環境や、外表施設、副葬品などに共通性が多く認められる。地域内に類似した性格の古墳被葬者を配置する体制がしかれていた可能性が考えられるだろう。こうした地域秩序の中心は、築造時期が共通し、3 基の中型方墳を陪冢として従える堂山古墳（Fig.63）の築造主体であると考えられる。

堂山古墳は全長 110 m の前方後円墳であり、遠江の中でも最大級の古墳である。葺石や豊富な形象埴輪を含む埴輪を備え、前方部、後円部ともに三段に築成されるなど、明らかに階層的な優位性が認められる。堂山古墳の後円部の埋葬施設は古い時期に破壊されており、その詳細を知ることができないが、帯金具の出土が伝えられるほか、舶載の内行花文鏡や神人龍虎画像鏡など 3 面の鏡が知られている。古墳時代中期の帯金具はその多くが甲冑に伴うこと、また、帯金具を備える甲冑は変形板短甲や古い段階の小札甲といった武装のなかでも階層的に上位に位置づけうる特殊例であることをふまえると、堂山古墳の中心埋葬施設にも上位階層の武装である特殊な甲冑が副葬されてい

た可能性がある。また、堂山古墳の前方部には鉄製武器を豊富に副葬する埴輪棺が知られており、畿内の大型古墳群で知られるような鉄製武器を大量に副葬する被葬者集団が想定しうる。堂山古墳に付属する陪冢の方墳群については、残念ながら埋葬施設の情報が得られていないが、樹立された埴輪は堂山古墳と酷似しており、古墳の築造位置とあわせ、主墳との密接な関係が想定できるだろう。

いっぽう、五ヶ山 B2 号墳は小笠山丘陵の末端に築かれており、墳頂部の埋葬施設からは、肩甲や頸甲を備えた A 類型の甲冑をはじめ、革盾、刀剣や鉾、鉄鏃などの武器・武具類が大量に副葬されている (Fig.65)。鉄鏃や農工具には堂山古墳前方部埴輪棺と共通する形態がみられ、副葬品における関連性が指摘できる。この古墳は小地域において初めて埴輪を採用し

ているが、その特徴は堂山古墳の I 群埴輪と酷似している。五ヶ山 B2 号墳の埴輪は堂山古墳の近隣地から搬入された可能性も想定しうるだろう。五ヶ山 B2 号墳は堂山古墳との密接な関係がうかがえ、武器武具に特化した副葬品組成から、その被葬者は堂山古墳の被葬者を軍事的な方面から補佐した人物と想定しうる (鈴木 1999)。

狐塚古墳についても、同時期に構築された方墳であることに加え、葺石・段築・埴輪といった諸要素が整っていること、先行する首長墓がみられない小地域に単独で立地すること、小地域内で初めて埴輪を採用していること、潟湖を臨む丘陵上に立地すること、短甲を保有することなど、五ヶ山 B2 号墳との共通性が数多く指摘できる。埴輪の様相こそ独自性が認められるが、その被葬者は、軍事的な地位を背景に小地域を統括する役割を担っていたと想定することができる。

遠江においては、律令郡域に相当する小地域を代表する前方後円 (方) 墳が概ね 50 m 級であることをふまえると、堂山古墳の隔絶性、優位性は明確である。堂山古墳被葬者の生前の影響力は、磐田原台地とその周辺に留まらず、遠江の広域に及んでいた可能性が高いだろう。堂山古墳から直線距離にして 20km の位置にある浜名湖北岸地域もその影響範囲内にあったと捉えられ、方墳を築くような従属的な人物を近隣地に配置する、王権中枢に類似した地域秩序の体制を整えていたとみることも許されよう。

(4) 潟湖をのぞむ方墳

方墳の特徴 古墳時代中期における大型方墳は、古市古墳群を代表例に、佐紀古墳群や百舌鳥古墳群の陪冢にみられる。いっぽう、地方に目を移すと、単独立地の大型方墳も認められる。これら



Fig.63 堂山古墳群の詳細

大型方墳は、各地域において普遍的に分布するのではなく、丹波や出雲、伊勢など、築造される地域に偏りがある。遠江においても、陪冢的な方墳と首長墓としての方墳の双方が認められ、畿内地域や大型方墳が認められる地域と共通する。遠江は、方墳の規模こそ小さいものの、倭王権の中核と近い、重層的な階層構成が体现されている地域といえるだろう。

方墳と潟湖 ここで、今一度、堂山古墳とその陪冢群、五ヶ山 B2 号墳、狐塚古墳の立地環境に注目しておきたい。盟主的な前方後円墳である堂山古墳は、大之浦と呼ばれる潟湖を臨む位置に築

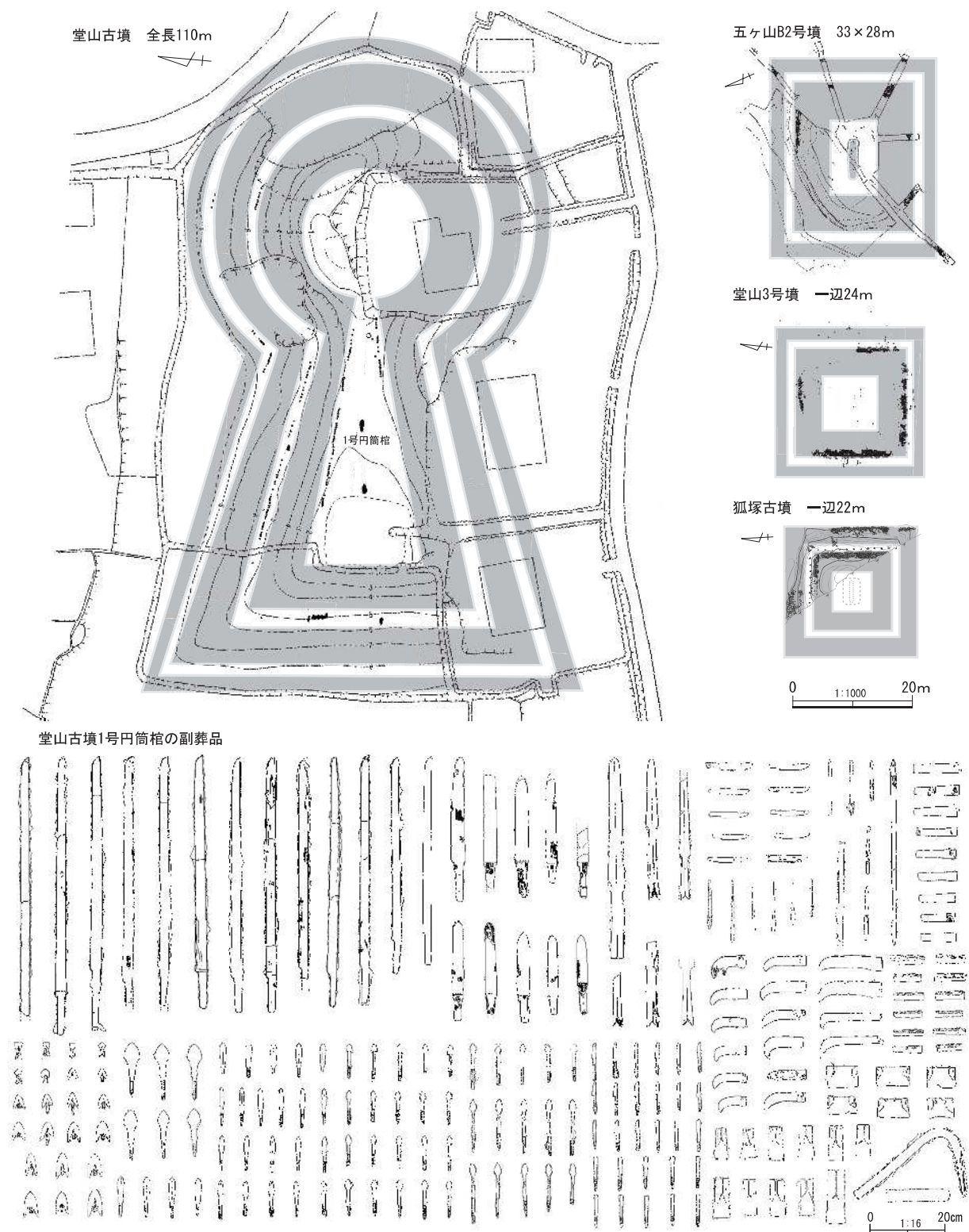


Fig.64 堂山古墳と中型方墳

造されている。五ヶ山 B2 号墳は、大之浦の西側に立地する原野谷川水系の潟湖「浅羽潟」を眼下に望む丘陵上に立地している。浅羽潟は、大之浦とも匹敵する面積をもち、安定した内湖として水上交通の利便性が高かったとみられる。五ヶ山 B2 号墳の構築を契機として、浅羽潟を望む小笠山丘陵西域の古墳の築造や集落の造営が活発化し、5 世紀後半には首長居館である古新田遺跡が形成される。狐塚古墳が構築された都田川流域も遠州灘から河川を伝って内湖である浜名湖を經由した海上交通が至便な地域であり、狐塚古墳が構築された丘陵は、陸上交通路である浜名湖北岸道と海上交通路が交わる地点にあたる。

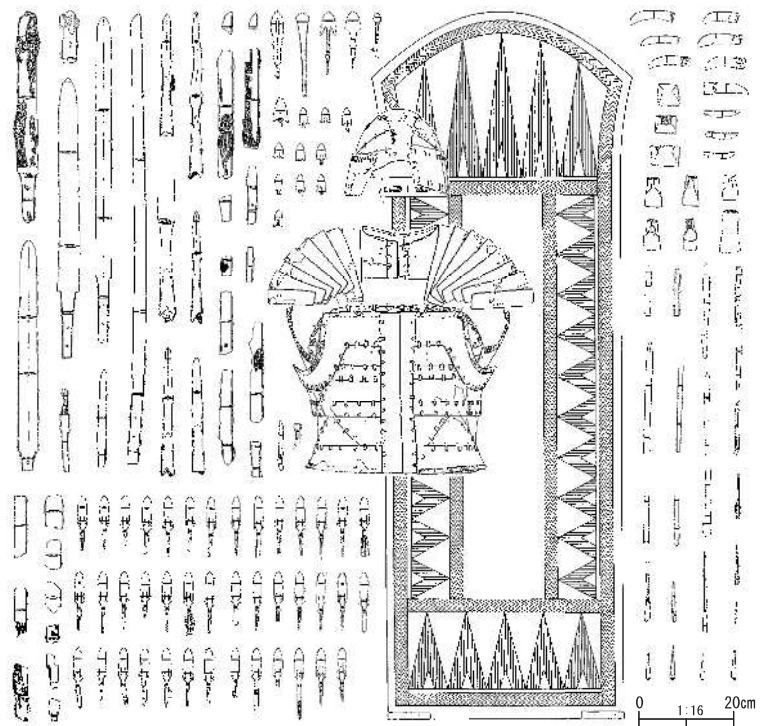


Fig.65 五ヶ山 B2 号墳の副葬品

堂山古墳群と遠江の中型方墳は、大之浦、浅羽潟、浜名湖といった三つの潟湖を臨む位置に立地しており、海上交通の要衝に位置しているといえるだろう。百舌鳥古墳群の立地に象徴されているように、古墳時代中期には海上からの景観を意識した位置に構築される古墳が顕著に認められる。5 世紀の朝鮮半島南部においても海浜部に近い位置に立地する倭系古墳が多くみられることをふまえると、海上交通網の整備や把握が当時の倭王権にとって重要課題であったことがうかがえる。遠江においても潟湖を繋ぐ首長間の交流網の形成が意識されたとみられ、軍事的な性格も付与された地域秩序が形成されたものと捉えられるだろう。海上交通網を活用した情報の交流は、倭王権の統制のもと、朝鮮半島や中国大陸にむかって開かれていたといえる。古墳時代中期は古代における大交流時代であり、狐塚古墳の被葬者も広域交流網の末端に連なっていたと評価しうるだろう。

(5) 小 結

狐塚古墳の諸要素を整理する過程で、同時代の方墳に注目し、副葬品組成や立地環境の共通性に注目した。狐塚古墳の被葬者像については、地域の首長としての性格に加え、堂山古墳の築造主体を軍事面で補佐し、浜名湖を通じた海上交通網と浜名湖北岸の陸上交通網を掌握した人物が想定できるだろう。また、軍事的な序列の面では、短甲のみを副葬する武装の組成から、もう一つの中型方墳である五ヶ山 B2 号墳の被葬者よりも下位におけると評価しうる。

また、当墳に採用された先進的な埴輪の特長と生産体制からは、倭王権との結びつきを強めた地域首長の力量もうかがうことができるだろう。古墳時代中期の方墳には、大型前方後円墳に付随するような従属性を認めることができるが、狐塚古墳のような単独立地の事例については、地域における主体性も認めるべきである。

遠江では、盟主的な大型前方後円墳の周囲に陪冢をめぐらし、近隣の海上交通の要衝に方墳を配置する特徴的な古墳の築造状況が認められる。方墳にかかわる古墳の立地からは、大之浦を中心に浅羽潟、浜名湖という三つの潟湖を臨む地域の連携体制が重視されていた可能性が指摘できた。海